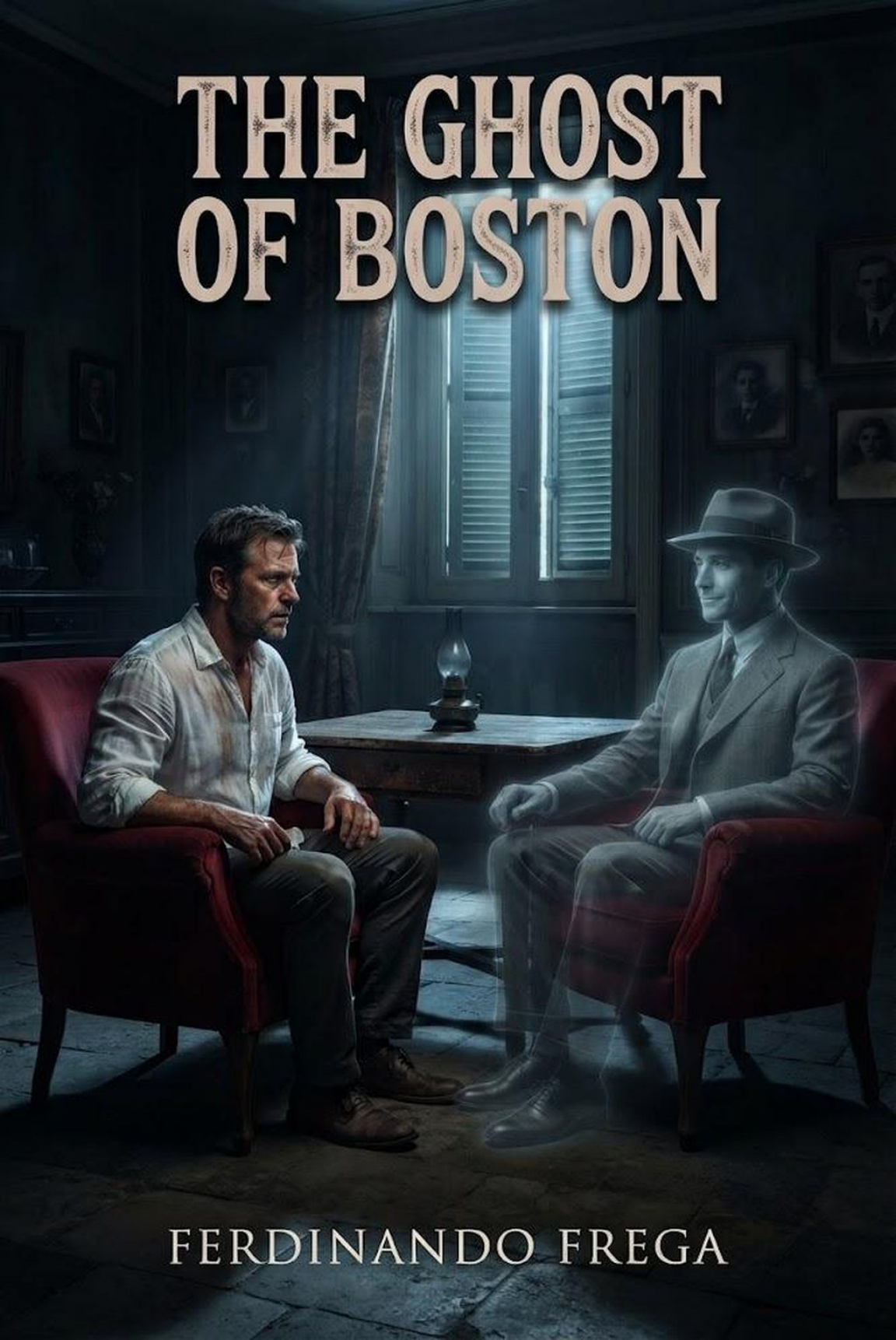
THE GHOST OF BOSTON



FERDINANDO FREGA

ボストンの幽霊

THE SYSTEM · 12

人生のここ2年間について語るとき、あなたはただ始まりと終わりをたどり直しているのではない。描いているのは、後戻りのできない断絶点だ。そこにはただ運命だけがある — 私の運命とよく似た運命が。

それはほとんどマントラになっていた。あなたは何者なのかと誰かが首をかしげるたびに、答えは自然に出てきた。多くの人にはなじみ深いのに、本当にわかっている者はほんのわずかしかいない答えが。

誰にも存在を予想されない者 — ただそれだけであること。それでも、あなたはそこにいる。そして私たちは同じ名を分かち合っている。

その存在の最初の本当の証人は、娘のジョルジャだった。23歳で、下肢に部分的な麻痺を抱えて生きている。お産が遅れたことと、おそらくは注意が足りなかったことによる、生まれついての贈り物だ。

彼女の怒りは、私にとっての挑戦になった。かつて私が母の墓に置いてきて、のちに彼女のなかにふたたび見いだした、あの同じ怒りだ。彼女は私に挑み、私に食ってかかり、私のふるまいのうち気に障ることを洗いざらい告げる機会を、一度も逃さなかった。彼女を育てたのは母親だった。素朴で教養のある女性で、そのうえ厄介なことに、社会の認める枠組みに完璧に溶け込んだ大学出でもあった。

それが彼女たちの普通だった。まさにそれこそが、私がいつも脇へ押しやり、自分の人生から締め出してきたものだった。

わが家の二人の女と言い争っても無駄だった。私が勝つことは決してない。彼女たちが正しいからではない。性格の問題だ。私はずっと、負けるのが好きだった。彼女たちはそれを知らなかった。

息の詰まるような8月の夜のことだった。私は夕食を抜いていた。親密さと食べ物の両方を手なずけたと自分に証明する、もうひとつのやり方だ。そのとき、鋭い物音で目が覚めた。

犬だと思った。私のアメリカン・ラブラドールだ。あんな音を立てるとすれば、理屈のうえではあいつしかいない。だが、私は間違っていた。

ダイニングルームまで行くと、赤い肘掛け椅子に座った彼が見えた。あの半分だけの笑みを浮かべて。

私は彼を知っていた。

ボストンの幽霊だった。

彼は部屋の向こうから旧友のように私に挨拶すると、すぐさま、サウジ・カラブリアまで旅をさせられたと文句を言った。摂氏45度は彼にとってさえ度を越していたし、メイン州の涼しい海辺を離れざるをえなかったことで、機嫌もよくはなかった。

彼は、私がGillettenarrativeのファンタジーのセクションに発表した三つの物語のことを持ち出した。『手相見』には同僚の多くが楽しませてもらったと彼は言った。なかには、あれがいったいいつ起きたことなのかと首をひねっている者もいるという。

続編を書く気はなかった。そこで彼を安心させてから、何の用で私の家へ来たのかと尋ねた。

「別の理由で来たんだ」と彼は答えた。

この面会の性質は、霊的なものでも、魔術的なものでも、秘教的なものでも、出版がらみのものでも、文学的なものでも、金銭的

なものでもなかった。彼はP&Gの誰とも取り決めを結んでいなかった。ただ、私自身の物語を私に語り、私が何者なのかを説明し、私の知らない私の一部を明かしたかっただけだった。

私ははっきり言っておいた。話が人類学的、系譜学的、あるいは婦人科的な方向へ転がるなら、1セントも払わない。何の契約にも署名しない。自分が高貴な階級の出なのか、どこかの古い家柄に連なるのか、知る必要はなかった。

すでにそうである自分でいれば、それで十分に思えた。

「お前の先祖はジョージア人だった」と彼は言った。「ロシア人と長いあいだ緊張のなかで生きてきた民族だ。まじめで、几帳面な人々だ。戦好きではない。ただ、生きることを愛する人々だ」

「ようこそ」と私は答えた。「これで話が面白くなってきた」

「お前は本当にたいしたくそったれだな、Bladefrega」と幽霊は言った。「お前が自分の生まれについて書いたことは、一部は本当だ。いつもお前を導いている、あの同じ本能だ。だが、これから話すのは、お前には決して書けなかったことだ。知らなかったんだからな」

彼はもうひとつの赤い肘掛け椅子を指さした。

「座れ。ここに占い師はいない。二人きりだ。互いをちゃんと見て、もう少しよくわかり合おうじゃないか」

フェルディナンド・フレーガ
Gillette Man ⚔️